
元太の大学生日記

さばら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元太の大学生日記

【Nコード】

N5179B

【作者名】

さばら

【あらすじ】

大学入学後、元太は大学野球部へと入った。これから4年間どんなドラマが待ち受けているのか？

元太START

光北学院高校を甲子園初出場初優勝に導いた元太は、高校時代の監督久保隆久の母校成修大学に進学した。

捕手層が手薄なチームにおいて正捕手候補として監督田川明彦からも大きな期待を受けている。

そんな元太に好機が巡って来た。

3月下旬、いよいよ春季リーグ戦が開幕する。

そのベンチ入りメンバーが発表された。

田川「背番号18、葛西!!」

葛西「はい!!」

田川「背番号11、大内!!」

大内「はい!!」

元太「（俺は入っているかな?）」

田川「背番号15、鈴木圭二!!」

鈴木圭「はい!!」

田川「背番号19、伊丹!!」

伊丹「はい!!」

銭場「（えっ!!伊丹がいきなりベンチ入りだって!!）」

田中努「（あかん!!兵庫大会決勝で打ち勝ったエースに先を越されたわ!!）」

元太「俺は大丈夫かな?」

そして、ベンチ入り捕手が発表された。

田川「背番号22、石本!!」

石本「はい!!」

元太「俺は大丈夫かな?」

田川「背番号31、小嶋!!」

元太「はい！！」

西田「やるじゃねえか、小嶋！！1年生捕手でいきなりベンチ入りは凄いよ！！お前とバッテリーを組むのが楽しみだ！！」

元太「西田、その前にちゃんと肩治せよ！！」

葛西「そう焦るなよ、西田。俺には今年しか無いけど、お前にはあと3年あるだろ。」

西田「は・はい！！」

その後、野手のベンチ入りメンバーが発表になった。

その中には金岡・佐藤慎也の元太の高校の先輩の名はあったが、1年生の名は無かった。

大内「小嶋、先輩の俺に対しても遠慮ガチなリードはいらない。思いつきりかかって来い！！」

小嶋「はい！！」

金岡「そうだぞ！！グラウンドでは先輩も後輩も関係ない。実力の世界なんだ。」

小嶋「絶対に勝ち抜きますよ、勝負の世界を！！」

4月上旬、ついに東京都学生野球連盟二部リーグが開幕した。

元太「ついに大学野球のグラウンドに立ったぜ！！」

伊丹「ここから長い戦いの始まりやなあ！！絶対、神宮に行くで！！」

田川「小嶋、伊丹！！早く集まれ！！」

元太・伊丹「は・はい！！」

黒田「（あの2人なら絶対に神宮を沸かせようや。そんなら、徹底的に鍛えなあかな。）」

元太は、最初の4試合はずっとブルペンで球を受けていて出場が巡って来なかった。

ところが5試合目の東都農科大学戦の8回裏。

ついに元太に出番が巡ってきた。

田川「バッター小嶋!!」

うぐいす嬢「六番戸谷君に代わりまして、小嶋君!! バッターは小嶋君。光北学院高校、背番号31。」

成修野球部員「おおおお!!」

金岡「コジ!! 力むなよ!!」

戸谷「小嶋!! 俺の代わりに打ってくれ!!」

金岡と戸谷がメガホンを持って声援を送っていた。

農科大の投手は、来年のドラフト候補にも挙がっている漆山幸介である。

漆山「(甲子園優勝に導いた新生に負けてたまるか。俺にもドラフト候補としての意地がある。)」

バッターブーン!!」

球審「ストライク!!」

田川「小嶋!! しっかり振らんか!!」

小嶋「(いけない!! 力が入りすぎている。)」

そして、5球目。

バッターカーン!!」

佐藤正「ありや!! これじゃピッチャーフライだよ。」

グラブ「パン!!」

農科大野球部員「おおおお!!」

漆山「よっしゃ!!」

田川「小嶋、だから言っただろ。あのコースのボールを打ったら凡打になるんだぞ。」

元太「すみませんでした。」

大学野球の厳しさを痛感した元太は、その夜遅くまで素振りを繰り返した。

黒田「新人らしからぬスイングや。大打者になるかもしれへん。」

金岡「今日の凡打が余程悔しかったそうですね。あの姿勢は他の1

年生を刺激させますよ。」

黒田「コジ、もうこんな時間やで。はよ寝たらどうや。」

小嶋「黒田さん、金岡さん。すみません、もう少しやらせて下さい。」

金岡「コジ、夜の睡眠も立派なトレーニングだ。やり過ぎるとすぐ潰れるぞ。」

小嶋「は、はい。」

5月上旬の祝日、場所は京拓大学グラウンド。

この日の国修館大学戦には歩美と光彦も野球観戦に訪れていた。

光彦「元太君がもう試合に出ているそうです。秋には正捕手は間違いないですね。」

歩美「このまま順調に行けば来年には神宮デビューするわね。今から楽しみだわ。」

うぐいす嬢「七番キャッチャー小嶋君、キャッチャー小嶋君。光北学院高校背番号31。」

光彦「ついにスタメンマスクですね。昨日までのDHよりお似合いですよ。」

歩美「DH？そうか。都連盟ではピッチャーは打たないのね。」

うぐいす嬢「ピッチャーは大内君。成修大学のピッチャー大内君。」

信越大附属高校背番号11。」

今日の成修の先発投手は、3年生左腕大内。

サン格拉斯の男「入学早々元太がスタメンマスクか。3年後には大化けするぜ。」

歩美「光彦君。あの男性、新一さんと声が似てない？」

光彦「そうですね。確かに近いですね。でも、声が似た人はよくいますよね。」

サン格拉斯の男「（成修が）一部に上がったら、元太の肩と毅の足の競争が見られそうだ。」

ついに元太がキャッチャーとしてグラウンドに立った。

歩美「元太君!!」

光彦「甲子園優勝キャプテンと少年探偵団のリーダーの意地を見せて下さいよ。」

元太「（絶対に一部に上がってやる。歩美、光彦、見てろよ。）」

元太「フオーク!!」

大内「よし!!」

ボール「ビシッ!!」

球審「ストライク、バッターアウト!!」

歩美「わ〜!!! 年生ながら見事なリードね。」

光彦「これならチームのテンションも上がりますよ。」

サン格拉斯の男「あと3年あるが、これからの成長が楽しみだ。きつと、全国優勝するぜ。」

多くの人から期待を背に受け、元太の大学生生活がスタートを切った。

・第一話終了・

いきなりのベンチ入り

光北学院高校を甲子園初出場初優勝に導いた元太は、高校時代の監督久保隆久の母校成修大学に進学した。

捕手層が手薄なチームにおいて正捕手候補として監督田川明彦からも大きな期待を受けている。

そんな元太に好機が巡って来た。

3月下旬、いよいよ春季リーグ戦が開幕する。

そのベンチ入りメンバーが発表された。

田川「背番号18、葛西!!」

葛西「はい!!」

田川「背番号11、大内!!」

大内「はい!!」

元太「（俺は入っているかな?）」

田川「背番号15、鈴木圭二!!」

鈴木圭「はい!!」

田川「背番号19、伊丹!!」

伊丹「はい!!」

銭場「（えっ!!伊丹がいきなりのベンチ入りだって!!）」

田中努「（あかん!!兵庫大会決勝で打ち勝ったエースに先を越されたわ!!）」

元太「俺は大丈夫かな?」

そして、ベンチ入り捕手が発表された。

田川「背番号22、石本!!」

石本「はい!!」

元太「俺は大丈夫かな?」

田川「背番号31、小嶋!!」

元太「はい！！」

西田「やるじゃねえか、小嶋！！1年生捕手でいきなりベンチ入りは凄いよ！！お前とバッテリーを組むのが楽しみだ！！」

元太「西田、その前にちゃんと肩治せよ！！」

葛西「そう焦るなよ、西田。俺には今年しか無いけど、お前にはあと3年あるだろ。」

西田「は・はい！！」

その後、野手のベンチ入りメンバーが発表になった。

その中には金岡・佐藤慎也の元太の高校の先輩の名はあったが、1年生の名は無かった。

大内「小嶋、先輩の俺に対しても遠慮ガチなリードはいらない。思いつきりかかって来い！！」

小嶋「はい！！」

金岡「そうだぞ！！グラウンドでは先輩も後輩も関係ない。実力の世界なんだ。」

小嶋「絶対に勝ち抜きますよ、勝負の世界を！！」

4月上旬、ついに東京都学生野球連盟二部リーグが開幕した。

元太「ついに大学野球のグラウンドに立ったぜ！！」

伊丹「ここから長い戦いの始まりやなあ！！絶対、神宮に行くで！！」

田川「小嶋、伊丹！！早く集まれ！！」

元太・伊丹「は・はい！！」

黒田「（あの2人なら絶対に神宮を沸かせようや。そんなら、徹底的に鍛えなあかな。）」

元太は、最初の4試合はずっとブルペンで球を受けていて出場が巡って来なかった。

ところが5試合目の東都農科大学戦の8回裏。

ついに元太に出番が巡ってきた。

田川「バッター小嶋!!」

うぐいす嬢「六番戸谷君に代わりまして、小嶋君!! バッターは小嶋君。光北学院高校、背番号31。」

成修野球部員「おおおお!!」

金岡「コジ!! 力むなよ!!」

戸谷「小嶋!! 俺の代わりに打ってくれ!!」

金岡と戸谷がメガホンを持って声援を送っていた。

農科大の投手は、来年のドラフト候補にも挙がっている漆山幸介である。

漆山「(甲子園優勝に導いた新生に負けてたまるか。俺にもドラフト候補としての意地がある。)」

バッターブーン!!」

球審「ストライク!!」

田川「小嶋!! しっかり振らんか!!」

小嶋「(いけない!! 力が入りすぎている。)」

そして、5球目。

バッターカーン!!」

佐藤正「ありや!! これじゃピッチャーフライだよ。」

グラブ「パン!!」

農科大野球部員「おおおお!!」

漆山「よっしゃ!!」

田川「小嶋、だから言っただろ。あのコースのボールを打ったら凡打になるんだぞ。」

元太「すみませんでした。」

大学野球の厳しさを痛感した元太は、その夜遅くまで素振りを繰り返した。

黒田「新人らしからぬスイングや。大打者になるかもしれへん。」

金岡「今日の凡打が余程悔しかったそうですね。あの姿勢は他の1

年生を刺激させますよ。」

黒田「コジ、もうこんな時間やで。はよ寝たらどうや。」

小嶋「黒田さん、金岡さん。すみません、もう少しやらせて下さい。」

金岡「コジ、夜の睡眠も立派なトレーニングだ。やり過ぎるとすぐ潰れるぞ。」

小嶋「は、はい。」

5月上旬の祝日、場所は京拓大学グラウンド。

この日の国修館大学戦には歩美と光彦も野球観戦に訪れていた。

光彦「元太君がもう試合に出ているそうです。秋には正捕手は間違いないですね。」

歩美「このまま順調に行けば来年には神宮デビューするわね。今から楽しみだわ。」

うぐいす嬢「七番キャッチャー小嶋君、キャッチャー小嶋君。光北学院高校背番号31。」

光彦「ついにスタメンマスクですね。昨日までのDHよりお似合いですよ。」

歩美「DH？そうか。都連盟ではピッチャーは打たないのね。」

うぐいす嬢「ピッチャーは大内君。成修大学のピッチャー大内君。」

信越大附属高校背番号11。」

今日の成修の先発投手は、3年生左腕大内。

サン格拉斯の男「入学早々元太がスタメンマスクか。3年後には大化けするぜ。」

歩美「光彦君。あの男性、新一さんと声が似てない？」

光彦「そうですね。確かに近いですね。でも、声が似た人はよくいますよね。」

サン格拉斯の男「（成修が）一部に上がったら、元太の肩と毅の足の競争が見られそうだ。」

ついに元太がキャッチャーとしてグラウンドに立った。

歩美「元太君!!」

光彦「甲子園優勝キャプテンと少年探偵団のリーダーの意地を見せて下さいよ。」

元太「（絶対に一部に上がってやる。歩美、光彦、見てろよ。）」

元太「フオーク!!」

大内「よし!!」

ボール「ビシッ!!」

球審「ストライク、バッターアウト!!」

歩美「わっ!!1年生ながら見事なリードね。」

光彦「これならチームのテンションも上がりますよ。」

サン格拉斯の男「あと3年あるが、これからの成長が楽しみだ。きっと、全国優勝するぜ。」

多くの人から期待を背に受け、元太の大学生生活がスタートを切った。

・第二話終了・

梅雨を乗り越え

5月下旬、成修大学硬式野球部は春季リーグ戦を7勝5敗勝点3で2位となった。

元太「（惜しい所で落とした試合が多かった。終盤の踏ん張りが最大の課題だろうな。）」

リーグ戦終了後も、授業の空き時間を練って練習に励んだ。

銭場「おっ！！小嶋が走っているぜ。俺も続こう。」

比嘉「太陽の下ランニングなら負けないぜ。」

同じ1年生の銭場と比嘉が元太の後に続いた。

リーグ戦が終わった3日後、4年生24名の内女子マネージャーを含む13名が引退した。

なお、主戦投手葛西、主将今村、四番打者佐藤正憲は秋も現役続行予定である。

田川「引退する4年生諸君、本当にご苦勞様。これから厳しい世界に足を踏み入れることになるが、野球部で鍛え上げられた精神は決して無駄にはならない。弱音を吐かず強気に前に進んでくれ！！」

4年生「はい！！」

元太「4年生の人達が早く引退するのですか？寂しいですね。」

葛西「小嶋、前向きに考えろよ。俺や今村や正憲は上（プロ・社会人）で（野球を）続行予定で単位取得も順調だけど、引退

する13名は、今年中の卒業と就職内定をさせようとの監督の配慮なんだよ。久保田とマネージャーの岩切は6月中の教育実習の予定が入っているんだ。」

元太「先輩方の苦勞が身に沁みます。」

引退から2週間後の朝、外は生憎の雨。

元太「ふあゝ！！今日の天気はどうか？」

カーテン「ザゝ！！」

元太「ありゃ！！なんてことだ！！外は雨だぞ！！これじゃグラウンドは使えねえな！！」

黒田「コジ！！驚かんでええ。梅雨のこんな人は日常茶飯事や。今日は、終日授業や。」

元太「黒田さんは勉強嫌いのようですね。」

黒田「わかるやろ。俺は、昔から勉強せんで野球ばつかやって来た。教室は苦痛としか表現できへん。対照的にお前は机に向う時間が多いやんか。練習虫に勉強虫。俺は勝てへんわ。」

元太「それは、将来指導者を目指して必死だからですよ。」

食堂では、雨のためか表情が曇っていた。

葛西「ふゝ！！こんな日じゃ野球どころじゃないな。」

佐伯「授業ばかりの日は嫌だよ。」

鈴木実「雨じゃ運動量が減り食欲も落ちるよな。」

福井「梅雨は大嫌いだ。早く夏が来ないかな。」

今村「今辛くても負けるんじゃないぞ！！この梅雨を乗り越えないと未来は切り開けないんだ！！」

野球部員「おゝ！！」

その日の午後、外は相変わらずの雨。

部員達は屋内練習場とトレーニングルームで汗を流していた。

元太「280、281、282。」

銭場「小嶋、大丈夫か？やり過ぎると壊れるぞ！！」

金岡「小嶋の体はそう簡単には壊れないんだ。アイツにはまだ序の口だよ。」

元太「293、294、295。」

そして、雨が上がり空には虹が発生した。

尚美「みんな、雨が上がったわよ!!」

野球部員「マジで!!やった!!」

田川「よし!!グラウンド整備してさっそく外での練習を開始しよう!!」

野球部員「お!!」

元太「やったぜ!!ついにグラウンドに立つときが来た!!」

伊丹「眠った感覚が戻ったで。」

全員で走り込みを終えた後、1人1人ノックを受けた。

ノッカーは、コーチの水田弘である。

バット「カーン!!」

水田「こら!!こんな球取れないならグラウンドから出る!!」
部員「申し訳ありませんでした。」

ノック後、元太はブルペンで数人の投手の球を受けた。

ボール「ビシッ!!」

伊丹「小嶋、どや？」

元太「まだ球が素直過ぎるな。あと20球だ。」

伊丹「お!!」

苦労の積み重ねがやがて実を結ぶ。

夏を越えて大きく成長していることだろう。

- 第三話終了 -

試験に向けて

6月末日、元太の通う成修大学では定期試験対策に追われていた。元太もこれまで取ったノートとプリントの見直しとコピーの連続だった。

元太「全然わかんねえな。もっと真面目にやったらよかったのに。．．．。」

そこへ元太と高校の同級生でもある野村敏司が現れた。

野村「小嶋！！」

元太「ノム、授業は順調か？」

野村「まあまあだな。俺は経済学と世界史がいまいちわかんない。」

元太「そうだよな。世界史の教授は口が早すぎて理解しにくいよな。学生の立場を弁えて欲しいよ。」

野村「これから大忙しだよ。セメスター制（半期授業完結制）でテストとレポートが大変になったぜ。」

元太「ああ。野球部の連中も、息をあっはあっさせながら“授業に出てれば”と嘆いてるんだ。お前のような勉強家が羨ましいよ。」

野村「は・は・は！！俺には小嶋と違って大きなことを成し遂げたことがないんだよ。4年間で高度資格を取るぞ！！」

元太「おお、ノム！！やる気満々だな！！俺も一部昇格．．．、いや大学日本一を目指すぞ！！」

野村「絶対に成し遂げるよ！！そのときは応援に行くからな！！」

元太「ところで世界史と経営学のコピーはどうしたんだ？」

野村「ああ、持ってきたぞ！！このコピーは貰えて当然だと思っ
てはいけないぞ。俺に感謝しろよ。」

元太「勿論だ。ありがとうな。」

野村「それじゃ、今から昼飯食いに行こうぜ。」

元太のお腹「ぐっ！！」

元太「調度いいな。俺、朝からちよつとした食ってねえな。」

野村「ちよつとしかって．．．俺の基準じゃ多過ぎだぜ。」

元太「それはお前が小食症だからだろ？」

伊丹「まあまあ、カリカリせんでええやんか。俺も昼飯に付き合つてええか？」

元太「伊丹、いつの間にか！！」

伊丹「さっき、環境学のサブテキストと地理のレポート用の本を買ったばかりなんや。これなら、題材に困らへんわ。」

野村「まあテキスト無しじゃレポートは書けないよな。でも、丸写しじゃ無意味だぜ。」

元太「想像力と文章表現力を発揮するかがテーマだよな。」

伊丹「小嶋の文章はどやったか？名人までは行かへんわ。」

元太「伊丹、余計な一言だぞ。」

野村「さっ、さっ！！もたもたしてないで早く学食へ行こうぜ。」

元太「そうだ、そうだ。何も食わないと戦はできないよな。」

伊丹「食い物と聞くと、小嶋の足がめっちゃ速いな。」

元太「こら！！いかにも俺が食い意地張っているような表現だぞ！！」

野村・伊丹「は・は・は・は（笑）！！」

同じ頃、光彦と歩美も試験準備に追われていた。

光彦「ふゝ！！」

歩美「光彦君、お疲れね！！」

光彦「勿論ですよ。連日、実験とレポートに追われているのです。しかも、点が悪いとペナルティがあります。」

歩美「理科大の勉強は本当に大変ね。私も授業に付いて行くのがやっとだわ。でも、光彦君なら乗り越えられるわよ。」

光彦「僕だけでなく誰も大変ですね。歩美さん、絶対乗り越えますよ。僕が科学を変えるのです。」

歩美「夢が大きいわね。」

光彦「でも、元太君には及びませんけど・・・。」

歩美「あっ！！ところで元太君はどうしているのかしら？」

光彦「今頃、テスト対策に追われているでしょうね。体育会の人であつても、テストは免除されませんからね。」

歩美「4年で卒業して一緒に社会人になりたいわ。」

光彦「ええ。僕も同感です。早く社会に役立つ仕事をしたいですよ。」

歩美「気合いを入れて、テストと梅雨を乗り切りましょう。」

光彦「はい！！」

元太、光彦、歩美。

みな進む道が違つても乗り越えるハードルは同じである。

3人に明るい未来が来ることを祈ろう。

- 第四話終了 -

決勝戦

高校野球選手権埼玉大会決勝戦は、3季出場を狙う光北学院と強打が売りの西浦学院の試合となった。

前期試験が終わり、夏休みとなった元太も応援に駆けつけた。

光北の先発は、4回戦で無安打無得点を達成した左腕藤原。

果たして、強力西浦打線をどこまで抑えられるのだろうか？

ファウルで2球粘った後の5球目。

武笠のバットは空を切った。

榎本「ストライク、バッターアウト!!」

光北応援団「おゝ!!」

美月「よし!!この調子で行け!!」

続く二番的野は見逃し三振、三番佐藤は二塁富岡正面へのライナーに倒れ三者凡退に終わった。

光北応援団「おおゝ!!」

元太「やるじゃねえか、藤原。かつての四球男がドクターKに変身だぜ!!」

美月「ええ。選抜から帰ってから、ノースロー訓練して矯正したんです。1年の時の藤原とは違いますよ。」

栗原「最初の頃の藤原先輩とは大違いですね。見るだけで捕るのが恐かったですけど、今はミットを構えたらよく決まりますよ。」

元太「バッティングでは俺に劣っても、カツのリードは俺と互角だよな。」

うぐいす嬢「代わりまして1回の裏守備に就きます西浦学院高校の、ピッチャーは鈴木敏文君。キャッチャー庵野君。ファースト

三浦君。セカンド的野君。サード唐沢君。ショート城野君。レフト

佐藤君。センター矢吹君。ライト武笠君。」

美月「トミ〜！！あんたからチャンスを作つてよ！！」

ボール「しゅ〜！！」

ミット「ビシッ！！」

栗原「球速いなあ〜！！」

美月「クリ、感心してないですよ！！」

栗原「すみません！！」

打席には、一番主将の富岡が向う。

うぐいす嬢「1回の裏光北学院高校の攻撃は、一番セカンド富岡君、セカンド富岡君。川月別所中学、背番号4。」

元太「トミ、お前が出る〜！！」

栗原「キャプテン、またバントヒット決めてください〜！！」

富岡「・・・（俺が出なきゃ先は無い。）」

鈴木敏は、庵野のサインに頷き第1球を投げた。

美月「トミ！！いきなりバントだわ！！」

バット「コーン！！」

矢吹「ファール！！」

2球目と3球目は見逃しボール。
そして4球目。

バット「コーン！！」

光北応援団「おお〜！！」

元太「これは決まったぞ！！」

池田「野手はどこにも投げられそうもないな。」

御影「フェア！！」

美月「トミ、よく決めたわね！！シノ、あんたが繋ぐのよ！！」

この後、二番篠原が初球を上手く転がした。

池田「よし！！これで、得点圏にランナーが出たぞ！！もしかしてトミは盗塁するかもしれないな。」

庵野「トシ！！二塁上の富岡には要注意だぞ！！」

鈴木敏「わかつてるよ。」

うぐいす嬢「三番センター叶君、センター叶君。朝馬第三中学、背番号8。」

栗原「叶！！ここ一番だ！！絶対に打て！！」

三番叶への3球目。

庵野の予言が的中したのか、富岡は三塁へと走った。

元太「ま・マジかよ！！」

久保「（サインしていないのに無理して走ったな。）」

矢吹「セーフ！！」

光北応援団「おおお！！」

池田「判断いいな、トミ！！これならホームへも悠々生還だぜ！！」

2・2となった5球目、鈴木敏は庵野のサインに首を振った。

叶「よし、狙い球だ！！」

バット「カキン！！」

観衆「おお！！」

打球は、右翼手武笠が飛びついて捕った。

美月「さあ、トミの足と武笠君の肩とどっちが勝つかしら。」

武笠が捕ると同時に富岡はスタートを切った。

栗原「セーフになれ！！」

本塁上はクロスプレーになった。

榎本「セーフ！！」

光北応援団「おお！！」

美月「凄いわ、トミ！！さすが足でかき回す男ね。」

元太「俺の足だったら入れなかっただろうな。」

池田「まあ。コジとトミの足は比べ物にならないだろうな。」

元太「こら！！余計な一言言つな。」

ベンチでは。

彩香「幸先好調だわ。でも、今年の西浦は終盤に手ごわいのよね。」

久保「……………（さすが冷静沈着な諏訪らしいな。遠藤なら、すぐ喜びを出すんだけど。）」

この後、天野は空振りの三振に倒れ、1点止まりだった。

元太「天野、残念だったなあ。次は打てよ。」

2、5回まで両チーム無得点で進行した。

6回裏、光北は失策、暴投を絡め、2年生鈴木亮哉が犠打を決めて2点差とした。

光北応援団「おおおー！！」

栗原「亮哉！！さすが小技の名手だ！！」

元太「亮哉が野球で食って行くには、バントが一番だろうな。」

榎本「ストライク、バッターアウト！！」

池田「これなら藤原の完封も間違い無しだ。」

元太「みんなで優勝旗を返しに行くぞ！！」

美月「でも、西浦打線は終盤手ごわいわよ。」

栗原「終盤を乗り切れるかが鍵ですよ。」

ところが8回表、試合は思わぬ展開を見せた。

藤原が一番武笠に投じた8球目。

球審榎本は、一塁塁審御影にチェックを要求した。

元太「振ってるだろうな？」

御影「・・・（セーフのポーズ）」

西浦応援団「おおおー！！」

美月「大丈夫かしら？」

池田「ついに疲れが見えてきたよな。」

元太「ああ！！」

久保「藤原、無理するなよ！！」

勝村「・・・・・・（藤原、打たせて打ち取るんだぞ！！リズムを保てよ！！）」

ところが、勝村の願い虚しく二番的野の四球を出し、三番佐藤に左翼前安打を打たれ、ついに2-1となった。

池田「大丈夫かよ、藤原！！」

美月「ノーアウト一塁三塁。犠牲フライで同点、長打で逆転だわ。」

久保「このままじゃ藤原で逆転されるな。よし、交代だ！！」

そこで、ついに久保は投手交代を告げた。

久保「ピッチャー森川！！」

うぐいす嬢「光北学院高校、選手の交代をお知らせいたします。ピッチャー藤原君に代わりまして森川君。九番ピッチャー

森川君。揚野大築中学、背番号11。」

元太「3人抑えろ！！抑えればこっちも物だ！！」

勝村「森川！！いつもの落ち着きで行けよ！！」

森川「ああ。」

元太「あれから成長したじゃないか。来年うち（成修大学）にくるかも知れないぞ。ツキや藤原より大学向きだぜ。」

美月「ええ。素直で目上の人に謙虚ですからね。」

池田「いや。俺と一緒にしろな。」

うぐいす嬢「バッターは、四番サード唐沢君。」

西浦応援団「おおお！！」

彩香「……………」（唐沢君と森川君とタイミングが合うかしら？）

「

森川は、勝村のサインに頷き第1球を投じた。

榎本「ストライク！！」

光北応援団「おおお！！」

美月「ナイス、森川！！」

元太「これなら3人抑えそうだぜ。」

そして2-2とした6球目。

榎本「ストライク、バッターアウト！！」

光北応援団「おおお！！」

美月「この調子なら大丈夫だわ。」

続く五番三浦は捕手勝村への飛球に倒れた。

美月「ナイスキャッチ、カツ!!」

元太「あと1人抑えればピンチ脱出だ!!」

うぐいす嬢「六番センター矢吹君。」

西浦応援団「おおお!!」

続く打者は、六番主将で巧打者の矢吹である。

栗原「矢吹さんはこの大会でラッキーボーイだった。ここで抑えろと大きいぞ。」

気合いの入った森川は、初球に得意の変化球を投じた。

榎本「ストライク!!」

光北応援団「おおお!!」

矢吹「.....(コントロールいいじゃないか!!)」

2球目・3球目は見逃してボール。

4球目・5球目は粘ってファール。

6球目は低めに外れボール。

西浦応援団「おおおお!!」

元太「次が勝負球だ。どこに投げるんだ？」

池田「ど真ん中は禁物だぜ。」

そして7球目、これが森川にとって痛恨の1球となった。

久保「.....(いかん。ど真ん中だ。)」

矢吹「.....(しめたぞ!!)」

バット「カキン!!」

美月「しまった!!」

元太「ホームランか？」

西浦応援団「おおおお!!」

打球は、右中間客席まであと10cmのところまで飛んだ。

二塁走者の野が生還しますは同点。

一塁走者佐藤も三塁を蹴った。

元太「これはクロスプレーになるぞ!!カツ、しっかり守れよ!!」

右翼手篠原の返球のタイミングはアウトである。

しかし、勝村がまさかの落球をした。

榎本「セーフ!!」

西浦応援団「おおおお!!」

矢吹「やったぜ!!」

打者走者矢吹は、三塁上でガッツポーズをした。

田上「よく打ったな、矢吹。俺も目が覚めたぜ!!」

三塁ベースコーチの田上也喜びの表情を浮かべていた。

元太「あちゃ!!」ついに逆転されたぜ!!」

池田「これが西浦打線の恐いところだよ。」

この後、七番城野は二ゴロに倒れた。

元太「びつくりしたぜ。俊足で好守。さすが城野先輩の弟だ。」

栗原「さすが兄弟揃って揚野高校で甲子園に出場した親父さんのDNAを受け継いでますね。」

3-2で西浦リードのまま9回裏光北の攻撃に突入した。

美月「ついに最後の攻撃だわ。このまま負けちゃうのかしら?」

栗原「わかりませんよ。下位バッターもしぶとさがありますから。」

うぐいす嬢「9回の裏光北学院高校の攻撃は、七番鎌田君に代わり

まして矢川君。バッターは矢川君。光北学院中学、背番号19。」

元太「おお!!1年生が初登場だ!!」

美月「彼は、中学の野球部時代からの逸材ですよ。」

バット「カキン!!」

しかし、初球を引つ掛けて投手ゴロに倒れた。

西浦応援団「おおおお!!」

美月「残念だわ。」

続く鈴木良哉は空振りの三振に倒れた。

久保は森川の所で代打を送った。

久保「バッター澄川。」

うぐいす嬢「九番森川君に代わりまして、澄川君。バッターは澄川

君。岩口中学、背番号16。」

美月「スミ!!最後に意地よ!!」

池田「……（もう遠藤が半泣きになってるぞ。）」

庵野「トシ、あと1人だ。でも、控えたからって油断するなよ。」

鈴木敏「ああ!!」

鈴木敏は、初球を投じた。

榎本「ストライク!!」

西浦応援団「おお!!」

美月「もうダメかしら!!」

2球目・3球目は見逃しボール。

4球目は空振りでストライク。

そして5球目。

バット「カキン!!」

光北応援団「おお!!」

美月「やった!!この後の一・二番で繋いで逆転よ!!」

うぐいす嬢「一番セカンド富岡君。」

元太「トミ!!全力疾走だ!!」

鈴木敏は、第1球を投じた。

榎本「ボール!!」

光北応援団「おお!!」

池田「ピッチャーに疲れが見えて来たぞ!!ここが狙い目だ。」

2球目も外れてボール。

そして3球目。

バット「カキン!!」

光北応援団「おお!!」

美月「ライト前よ!!わ!!三塁へ行ったわ!!」

澄川は、三塁へと滑り込んだ。

光北応援団「おお!!」

小林「タイム!!」

西浦監督小林は、ここでタイムを要求した。

池田「これで今日3回目のタイムだ。」

元太「長いな。余程慎重みたいだぜ。」

そして試合再開。

打席には、篠原が向う。

うぐいす嬢「二番ライト篠原君。」

光北応援団「おおおー！！」

美月「シノー！！ここで打つてよ！！」

庵野「トシ、わかってるな。」

鈴木敏「ああ。」

鈴木敏は、庵野のサインに頷き1球目を投じた。

榎本「ストライク！！」

西浦応援団「おおおー！！」

池田「さっきのタイムが効いてコントロールがよくなった。」

2球目は低めに外れボール。

3球目、篠原が空振りした後富岡が二塁へ走った。

天倉「セーフ！！」

光北応援団「おおおー！！」

美月「これで一打逆転サヨナラのチャンスだわ。」

元太「二者生還で連続出場を決めるぞ！！」

4球目は外に外れボール。

5球目は、三塁側の投球練習場に入りファール。

6球目は、バットが止まりボール。

そして7球目。

バット「カキン！！」

打球は、二塁方向に転がった。

元太「抜ける、抜ける！！」

池田「抜ければ逆転サヨナラだ！！」

二塁手の野が追いつき一塁へ送球。

篠原は、頭から滑り込んだ。

元太「判定はどうだ？」

美月「お願い、セーフになって……。」

久保「……………」

小林「……………」

彩香「……………」

光北応援団「……………」

西浦応援団「……………」

御影「アウト!!」

西浦応援団「おおお!!」

美月「残念だわ!!」

元太「惜しかったな、シノ!!」

池田「でも、3年間全力でやってくれたよ。ナインに拍手を贈ろう。」

元太「それに、強打の西浦打線を3点に抑えた投手陣は見事だったよ。」

選手達「お!!!!」

サイレン「あああああ、あああ!!」

うぐいす「ご覧頂きました本日の決勝戦、光北学院高校対西浦学院高校の試合は、3対2、3対2を持ちまして西浦学院高校が勝ち優勝いたしました。只今から西浦学院高校の栄誉を称え、同校の校歌を演奏して校旗の掲揚を行います。」

球場中に西浦の校歌が木霊す中、光北学院ナインからは涙が止まらなかった。

そして2人の女子マネージャーも、人目をはばからず涙を流した。

元太と池田は、駅へ歩きながら会話をしていた。

元太「残念ながら連続出場はなかったけど、来年に繋がるいい試合だったよな。」

池田「ああ。1年生の矢川は間違いなく大物になるぜ。」

元太「俺にとって束の間の休みだったけど、いい思い出になったぜ。」

「池田「これから夏の強化練習なんだろう？俺達も東海地方での遠征試合があるんだよ。」

元太「全国の大学を見るチャンスだろうな。これからも研究を怠るなよ。」

池田「勿論だ。神宮の試合でベンチ入りするぞ！！」
新たな決意を胸にそれぞれの道へと進んだ。

・第六話終了・

いよいよ夏休み

7月下旬、成修大学では前期試験が行われていた。

元太達1年生にとつては、最初の成績が決まる試験とあつて緊張の連続だった。

元太「ふゝゝ！！次は経営学か？簿記が不本意だったから巻き返すぞ！！」

銭場「おおゝ、気合い充分だな。俺なんか、どれもボロボロだった。

」

田中努「練習虫で勉強虫の小嶋に追いつかなあかな。野球ばつかやとつた俺はダメ男や。」

伊丹「努、まだまだ試験は始まつたばかりや。気を入れ替えて次に挑んだらええ。」

元太「よし！！勇気が出たぞ！！次の環境学も取るぞ！！」

そこへ3年生の末続真男が通り掛つた。

1年生「末続さん、おはようございます！！」

末続「さすが指導者志望の小嶋だな。野球ばかりでなく人間面も重要だぞ。グラウンドを離れてからの努力をした者が勝つんだ。」

元太「はい。それは百も承知だと思います。」

比嘉「監督が新聞も読めと仰ることがよくわかります。」

末続「ああ。特に比嘉の新聞への熱心さは部内でも有名だしな。今が自分の見つめ直す機会だろうな。」

1年生「は・はい！！」

翌朝、元太達は新聞を見て一喜一憂していた。

元太「光北学院、光北学院。おおっ！！3試合連続完封だぜ！！すげっ！！藤原がノーヒットノーランだつて！！」

西田「藤原？あの左腕が成長したよな。俺の母校は、サヨナラ負けしたぜ。本当に悔しい。」

元太「落ち込むなよ。ここまで来れば立派だと思えよ。」

西田「ところで、今日は月潟が先発登板らしいぜ。」

元太「今夜が楽しみだぜ。イーグルズ史上２人目の１８歳先発勝利を挙げたんだしな。」

西田「このまま２００勝は間違いないよな。それだけじゃない、高校時代から抑えとしての適性もあったよな。」

元太「ああ。ツキがリリーフ登板すると殆ど失点無しかったよ。先発して、一旦外野に回りそしてリリーフしたこともあったんだ。」

西田「２００勝して１００セーブ挙げてピッチャーは１人しかいないな。月潟は３０年に一度の逸材だろうな。」

そして、定期試験が全て終了した。

元太と銭場は学食近くを歩いていた。

元太「銭場、お前の点はどうだった？」

銭場「ダメだよ。野球ばかりやって勉強を疎かにしてたからな。大部単位を落としたよ。」

そこへ学生コーチの田中泰造が現れた。

元太・銭場「こんにちは！！」

田中泰「すぐ落ち込むなよ。いつまでも引きずってたら伸びないぞ。気持ちを切り替えろよ。」

銭場「はい。今度はきちんとやります。」

田中泰「それでいいぞ、銭場。失敗は成功のもとだよ。」

元太「さすがことわざをよく使う泰造さんらしいですね。」

田中泰「小嶋、お前に褒められてもな。」

夜、寮の廊下にて。

元太「終わった、終わった。明日からキャンプ前まで少しの間家に帰ろう。」

黒田「母校の試合を観に行ったらええで。後輩の闘士を見るのも大事や。」

元太「はい、わかりました。後輩の活躍は自分の最大の励みになりますよ。」

黒田「俺も帰郷したときに母校の試合をよう観た。スランプ脱出のヒントが隠されとるかもしれへん。」

元太「ただ試合を観るだけでなく、フォームのチェックもします。」

黒田「よし、それで行け！！明日は金岡も一緒や。」

それを比嘉が羨ましそうに聞いていた。

比嘉「母校の試合観戦か？でも、沖縄ではもう代表が決まっ
ていて観に行けないよな。俺の母校は決勝敗退だったし。

でも甲子園での活躍を楽しみにしているぜ、島商（島城商業）。」

元太は、寮を出た足で実家へと戻っていた。

理沙「歩美、急ぎ足で歩いているの元太君じゃない？」

歩美「本当だわ！！野球選手のランニングそのものね。」

理沙「元太君神宮目指して頑張っているそうだけど、私の大学では野球部と聞いてもアツケラカンなの。」

歩美「それは残念だわ。学生達に元氣を与えてくれそんな人がいると私達も変わるのにな。」

理沙「そうね。元太君は、きっと指導者になるわよ。」

歩美「わっ！！監督として甲子園に行くのが楽しみだわ！！」

元太「ただいま。父ちゃん、母ちゃん！！」

元太の母「お帰り。元太、より一層たくましくなったじゃないの。」

元太「ふっ！！厳しい練習の中でこんなに痩せたんだよ。」

元太の父「それは、お前にとって努力の賜物だよ。3年経て場もつと磨かれるんじゃないのか。」

元太「よし！！もつと変わって見せるぞ。」

元太の母「でも進む方向を考えてよ。」

全員「は・は・は・は（笑）！！」

7月30日、埼玉大会決勝戦。

彩の国スタジアムは、2階スタンドまで解放する大賑わいとなった。3年生マネージャーの遠藤美月と2年生マネージャーの栗原大輔が応援席に近づく元太に手を振っていた。

美月「小嶋先輩!!」

栗原「たくましくなつてびつくりしましたよ。」

元太「遠藤にクリ。遅れてごめんな。あれっ!! 諏訪(彩香)はどこにいるんだ?」

美月「彩香はスコアラーとしてベンチ入りしているんです。私と入れ替わりでベンチに入るんですよ。」

元太「そうなのか。去年は池田1人で大変だったけど、今年は大部助かるだろうな。」

栗原「それでしたら、来年は僕がベンチ入りですか?」

美月「クリ、新チームのことは来年までわからないわよ。」

栗原「すみません。」

美月「先輩、試合始まりますよ。」

元太「よし、強打の西浦を抑えろ!! 藤原!! ノーヒッターの意地を見せる!!」

決勝戦は、昨夏の甲子園の覇者でここまで僅か5失点の光北学院と、対照的に打率・392を誇る西浦学院の対戦となった。

うぐいす嬢「お待たせいたしました。決勝戦、光北学院高校対西浦学院高校の試合間もなく開始でございます。まず1回の表

守備に就きます光北学院高校の、ピッチャーは藤原君、キャッチャー

勝村君、ファースト天野君、セカンド富岡君、サード

井上君、ショート鈴木亮哉君、レフト鎌田君、センター叶君、ライ

ト篠原君。この試合の審判は、球審榎本、一塁御影、二塁

天倉、三塁矢吹。以上四氏でございます。」

美月「昨年の決勝の藤原よりは、堂々としているわ。強打の西浦を梃子摺りそうね。」

榎本「プレーボール!!」

サイレン「あああゝ、あああ!!」

うぐいす嬢「1回の表西浦学院高校の攻撃は、一番ライト武笠君、ライト武笠君。さいたま光見中学、背番号9。」

美月「1球目はどうかしら？」

藤原の投じた1球目は？

ミット「ビシッ!!」

武笠「（これは外れたな。）」

ところが・・・。

榎本「ストライク!!」

光北応援団「おおゝ!!」

元太「去年よりコントロールがよくなってるぜ。」

藤原の1球で、高校野球埼玉大会決勝戦は幕を開けた。

果たして、光北学院の三季連続甲子園出場はなるのだろうか？

- 第五話終了 -

卒業

小嶋元太達が心を1つにして来た4年の月日があつと言う間に過ぎ去った。

成修大学硬式野球部は元太が2年の春に一部昇格を果たし4年春には優勝を果たした。その秋にはエース伊丹がプロ入り、元太が社会人野球入り、そして殆んどの野球部員が卒業決定と有終の美を飾った。

そして今日3月22日の卒業式に臨む。

元太「ついに今日で卒業だよな。」

伊丹「ほんまにあつという間の4年間やったなあ。」

加藤「本当によく耐えたよな。伊丹なんか“すぐに逃げたる。”とぶちまけてた癖に今じゃ離れたくない気持ちでいっぱいだよな。」

山本「小嶋は今日の式で総代を務めるんだよな。さすがは我が成修の顔だぜ!!」

比嘉「でも小嶋、お前はスレスレの成績だったじゃんか。」

元太「て言うか比嘉、お前なんか勉強ばかりだったじゃんか。3年でフル単で4年は就職活動と卒論製作に没頭してたじゃんか。・・・。」

比嘉「まあ、俺は上で野球続けるつもり無かったから、早いうちに見切りをつけてたんだよ。」

伊丹「ようわかる。プロ野球選手になるだけが人生とちゃうで。」

山本「伊丹。プロでは無理スンナよ。無理がたたと怪我しちゃうから。」

元太「月潟との対戦を楽しみにしてるぜ。」

伊丹「小嶋。まあ、月潟と俺は別やから・・・。」

野村「おい、そろそろ卒業式が始まるぞ!!」

元太「野村。今行くから。」

そして講堂。

山本「ついに人生最大の式典が始まるぞ。」

元太「もう学生じゃなくなるんだからな。」

学長「只今から第100回成修大学卒業式を挙行いたします。一同起立。」

祝辞が終わり、ついに卒業証書授与に入った。

山本「おお、ついに小嶋の番だ。」

学長「経営学部総代、小嶋元太。」

元太「はいー!!」

卒業生「パチパチパチ!!」

元太「……（嬉しい。俺は卒業したんだ。卒業試験の時の苦勞が報われたぜ）。」

野球部の仲間達は皆、元太の雄姿を称えていた。

そして、卒業式終了後の桜並木。

元太「この桜が俺達を見送ってるんだ。」

山本「人生はこれから勝負だ。」

伊丹「よし。40まで投げ続けるで。」

元太「みんなー!! 離れ離れになっても、心はひとつだ。負けるなよ。」

全員「おー!!」

こうして、小嶋元太の4年間の大学生生活は幕を下ろした。
大学で過ごした日々を忘れずに厳しい社会を勝ち抜いてほしい。

- 完 -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5179b/>

元太の大学生日記

2010年11月16日10時01分発行